

久保三六五番地第二へ

わが父の描いていた図式によれば「田中重吉」は「久保」の貧乏人の息子で、「渡部クラ」が隣村「河原」の豪農のお嬢さん、という触れ込みであった。なぜ父の中でそんな風に定着して行ったのか。それがどうやら間違いの元らしい。実際に原戸籍を手にして仔細に検討してみると、かなりの歪み、体温差があるのがわかった。何の事はない。「田中重吉」は「河原六番戸」の生れで、五番戸の「渡部家」とは、その当時、隣同士だったのである。

■なぜこんなに目まぐるしく「本籍」を移動させたのか？

これまで、何度となく「田中重吉」が、明治二六年に「正岡周平」の養子となって西明神入りした出来事には触れてきた。それからの「正岡重吉」の本籍は、ほとんど二、三年置きに、目まぐるしく移動する。明治五年に「戸籍制度」を押し付けられたのだから、その当時の人が、戸籍に対してどれほどの意識を持っていたかは知らない。が、こんなに「本籍」を慌ただしく動かしているのはただ事ではない。その分だけを抜粋してみると――。

①愛媛県風早郡河原村六番戸 田中利平次男(仙波印)

兄嘉蔵 明治一三年一月相続

②上浮穴郡西明神村五三番戸 正岡周平養子入籍(山之内印)

弟慶三 明治二〇年一月相続

③全郡全村大字入野三四番戸 分籍 クラ入籍

④全村大字西明神五七一番地 明治三五年六月一日「西明神五

三番戸 全居ヨリ転籍」と正岡家戸籍に記載されているが、同時に

田中家戸籍でも明治三五年全月全日「當県上浮穴郡明神村大字西明神五三番戸ヨリ転籍」とある。



「粟井の里」の航空図。真ん中を横切る粟井川を挟んで、下が「河原」で、川を越えると、すぐに「久保」だった

ところが奇妙なことに、続けて「明治三十九年九月二二日温泉郡粟井村大字久保四三七番地ヨリ転籍届出同日 受付入籍」とある。受け入れ先は「久保三六五番地第弐」。

どうも、この目まぐるしい動きに役場の方が混乱を来たのではないだろうか。同じ字句が明神側にも記載されている。

「全年全月全日、温泉郡粟井村大字久保四三七番地ヨリ転籍届出同日受付入籍」とされている。どちらが正しいのかは、次の事項に関わりがある、と見ていいだろう。

⑤温泉郡粟井村大字久保四三七番地 明治四〇年九月二二日「當村大字西明神五三番戸慶三養母正岡ユキ養子協議離縁届出全日受付明神村戸籍吏代理助役山之内濃太郎受付 明治四〇年一〇月一九日温泉郡粟井村大字久保三六五番地第弐へ転籍届出 同日温泉郡粟井村戸籍吏代理助役竹内利十郎受付」とあり、粟井側でも「明治四〇年一〇月一九日上浮穴郡明神村大字西明神五七一番地ヨリ転籍届出同日受付入籍(竹内印)」と符合しているから、「久保三六五番地第弐」の本籍は、このときから用意されたと思われるべきだし、ある時期に一旦、戸籍は西明神から「久保四六七番地」に「緊急避難」し、明治三十九年九月、何らかの理由があつて、再び「西明神」の「五七一番地」の方へ復帰するのである。養父・周平さんの死が三十九年八月一八日、ユキさんとの協議離縁が翌年の九月。鍵はやっぱり、この辺にありか。

⑥温泉郡粟井村大字久保三六五第二 重吉・クラ夫妻にはすでにこのとき、五男一女をもうけている。ところが、長男・順吉は「出生事項ヲ知ルコト能ハサルニツキ其記載省略」と気になる表現をされているのはいい方で、以下、重徳・徳一・鶴一・亀一は簡単に「生年月日」と「同日受付」が記載されているだけで、明神なのか、粟井なのか定かではない。ただ、長女のキミエだけは「明治三十四年五月一日出生届出全日受付 全日當県温泉郡粟井村戸籍吏大森盛直受付 同一二月九日届書發送同月一三日受付(印)」と精密に両方に記載されている。

こうした経緯から見ると、すでにキミエさん誕生当時には、重吉一家は西明神から引き上げて、河原の隣村である「久保」に新居を移し、そこで新しい生計を立て始めたのではないだろうか。多分、それは、そのころの伊予地方で大流行し始めた、新しい交通手段「客馬車」との関わりであつたに違いない。従つて、父・徳一は粟井村久保で生れ育ち、河原は母の実家のある隣村に過ぎなかつたのだ。それで、少しは得心がいく。

河原の里を北条市の中心・辻町の方向へ向かつて北上し、粟井橋を渡ると、そこからが、かつて「粟井村大字久保」と呼ばれた地区だった。例の『ゼンリン住宅図』によると、県道北條線に面して右側には「三六五―一 渡部五郎」という注目すべき記載があり、その隣りこそ「三六五―二」、つまり重吉一家が暮らした場所だった。今、だれが住んでいるのか。『住宅図』では空白のままであったが。

GSと生け垣のある屋敷に挟まれて重吉とクラ一家が暮らした久保三六五―二番地
思いもかけず、渡部家の墓参がかなったばかりは、勢いをえて、あの
時期、瓦の生産で有名だった久保を目指して、街道を北上した。
もちろんクルマは粟井川畔に置いたままにして。

『コスモ石油』の看板を掲げたガソリンスタンドが「渡部五郎」に
当たる場所だった。すると、その北隣の、ごく最近に整地したらし
い敷地が「三六五―二」ということになる。真新しい二階建ての家
の玄関口には、表札も出ていない。白と赤の可憐な花が小さな花壇
で咲き零れているのが、無人でない印しだろう。もう一つ、左隣り
の、かなり年季の入った屋敷の表札を確認してみる。「新田稔」さん



か。地図にあつた通りじゃないか。すると間違いなく、「重吉・クラ」
の痕跡を探し当てたことになる。

ほっとして時計を見る。午後三時。中途半端な時間だが、一旦、
門田旅館に戻って一休みして、午後六時からの竹田館長との食事会
に備えるとするか。

この日も、前日同様、収穫の多い一日になりそうだ。そう、願
いたい。

■虚子の書き遺した「旧街道」

この日の行動記録のすべてを、誠実に書き留めようとしたなら、
幾度、一九六号線を登場させなければならなかっただろうか。高縄
半島の西側を伊予灘沿いに、松山と今治を結ぶ、古代から発達した
幹道は、かつては「今治街道」と呼び慣わし、今では「県道・北條湯山
線」という味気ない公式名を持っているが、そう呼ぶひとはほとんど
ないという。この道については松久敬さんの『旧街道』が、昭和四
〇年代の様子を描いて貴重な資料となっているが、俳人の高浜虚子
が大正六年に発表した『露のわれ』（「ホトトギス」一二月号）とい
う短文は、さらに生き生きとした描写で大正時代の街道の様子を、
偲ばせてくれるので、国会図書館でコピーしておいた。ちなみに、
虚子（本名・池内清）は少年時代を、この街道筋にある「西ノ下」と
いう小部落で送っている。

（前略）其頃この道に乗って往來するといふ事は非常に贅沢な

事であった。十歳未満の私も騙されずかされて三里半の道歩いたものであった。其苦しい道の目標であった金毘羅様の赤い建物を後にして私の車は間もなく粟井坂にきた。この坂は松山から柳原に行く第一なので難関あつて、昔は車は通らなかつたのであるが、今は山上を通る事をやめて、山鼻の海中に突出している処に道を作つて脚下に碧い海を踏まへながら山裾を迂回し坦々たる大道を車で通る事が出来るようになっていた。車の上から見下ろした波は底の小石まで見え透ける様に美しく透明であつた。(中略)今小さい魚は其美しい潮の中の日影をうけて泳いでいるのが明らかに認められた。



高浜虚子の胸像と句碑がある西ノ下の「太子堂」



一九六号線粟井橋をいくお遍路さん

其粟井坂を過ぎてしまふと其処に坂と同名の村があつて、道幅は東海道ほどないけれども道を挟んだ老松の並木の模様が、東海道を彷彿せしめるやうな景色であつた。其粟井村を進むと次には鹿峰(かのみね)と言ふ処に出た。この鹿峰に就いて私のただ一つの記憶は、私が柳原の向こうの西(にし)の下(げ)に郷居していた七八つの頃、其村の一老媪が鹿の峰の紺屋へ染物を頼みに行くから私を連れて行こうと言つて此処迄連れ立って来たことがあつた。其老媪が今迄生きておつたら百歳近くなつていゝであらう。其紺屋が今でもあるかどうかと思ふて心当てに道の両側の家並を見たけれども見つからなかつた。若い車夫は両肩を怒らすやうにして梶棒をにぎつた俣疲労といふ事を知らぬげに相変わらず疾風の如くに駆けるのであつた。

これでは、まだ上つ面に過ぎない。長くなるが、折角の機会だ。もう少し引用する。

私が松山を出たのは九時半頃であつたらうか。それが柳原に着いたのは十一時ころであつた。此処では昼食をする計画であつたので此(この)島(しま)屋といふ料理屋の前に梶棒を下ろさせた。(中略)此島屋と言ふ名前を聞いた時は何となく幼い時にも屢々聞いた事のあるやうな懐かしい響きを伝へるのであつたが、今親しく目の前に其家を見るに及んで、田舎びた粗末な料理屋であるのに聊か興の醒めたやうな心持がせぬでもなかつた。

虚子はここでこの村の村長や助役、仙波花叟という地元の俳人ら

と昼食を摂った後、ポツリ、ポツリと降り出した雨の中を、北條町まで雨傘を借りて歩き出した。

此島屋を出て一二町も行くと、そこに一つの橋があった。これが私の幼い記憶に残って居る大川の橋であった。今見ると大きな川ではないけれども子供の頃にはこれが何となく気持ちの悪い、恐ろしい大きな川のやうに思はれたのであった。さうしてその土橋は縁に草が生えて居つてもっと大きな橋であったやうに思はれて居たが、今見ると決して大きな橋ではなかった。さうして幾度か出水のため押し流された結果、今は土橋ではなく木を組合した橋になって居た。両縁が盛り上がったやうに高くなってそこには草が青々と生えていて、真中は真つ白な土が日の光をうけて輝いて居た当年の土橋の面影を、今此木橋から想出さうと思つても一寸容易に想出せなかつたほど其辺の様子が違つて居た。幼い時は此川を他国と境した濠とも心得て容易に此川から外に出なかつた私は今、逆に柳原の町からその幼い時の我天地であつた西ノ下の方に橋を渡つて歩みを入れたのであつた。懐かしい西ノ下の天地はすぐ私に一つの古びた小さい建物を目の前に持ち来たした。それは橋の袂の堤の上にある太子堂であつた。私の父が他の三軒の家と共に、松山の城下を引き払つて郷居をしたのは、実に此太子堂のある土手の下から往来に沿ふて軒を並べたのであつた。(中略)

此松の下に佇めば露の我

虚子一家が住んだのは、四〇年ほど前のことだつた。何もなかつた畑中に軒を並べた四軒の家は、その後一〇年ばかりの間に取り払われてしまつて、もとの畑になつてしまつたのを、虚子は、改めて、知つたのである。変わらないのは太子堂だけか。虚子の句碑をそこへ建てる話が持ち込まれていた。

「どの辺に建てたらいいでせうか」と仙波君はその辺を見回して言つた。太子堂の後ろのほうに当たつて一つの石碑があつた。其は四国遍路に来て亡くなつたらしい一人の女の碑であつた。国は備中であつたやうに記憶する。其石碑に並べて建てるのも面白いと思はぬでもなかつたけれども、私は躊躇する事なしに一つの場所を選定したのはそれは太子堂と共に私の幼い頭に牢記されて居る一つの大きな老松の根方であつた。耳を澄ますと其の松の梢には風が当たつて奥底の知られぬやうな深い静かな響をつたへて居た。此松の籟(こゑ)は今ここに佇む迄は久しい年の間忘れて居た声であるが、かく聞いて見ると、それは昔大川の水と共に私の臆病な幼い心持を愕き戦かしめたものの一つであつた。此老松の下に立つた時に、此底知れぬ響は人の世の気味の悪い何等かの暗示である様な心持がして、傍に人が居ないときなどは忽ち踵を返して我家の方に逃げて帰るのであつた。其松の籟(おと)が今もなほ四十年の昔に異なる事なく響きつた。

「此根方がいいでせう」と私は言った。仙波君もそれに異議はなかった。私は暫く其松の下に佇んで居た。秋雨は松を透かして傘の上
に落ちた。

此松の下に佇めば露の我

此句を心の中に繰り返しながら黙って立って居た。此句が善いか
悪いか俄かに判断は付かなかった。然し其時の心持は色となり響と
なって自ら此句に現れて居るやうな気がした。(後略)

「3分後に、もう1度お電話を」

辻町の中心部にある門田旅館を午後六時一〇分前に出た。夕暮れに
は、まだ時間の残された明るさであった。約束の「かぢや」は一九
六号線沿いの海側にあつて、すぐに判つた。と、店の前で竹田館長
(当時・現在は北条歴史文化研究会会長)が笑顔で出迎える。何と
いう心遣いだらう。

■「河野残党の哀しきドラマ」

奥の一室が予約されていた。玉井利明さんは、神社の仕事が入つて
来て出席できなくなつた。本人に代わつて、竹田さんがいかにも済

まなさそうに釈明するのがおかしかつた。得居衛さんのこと、「風早」
誌のこれから、経文を小石に書き込んだ祈りの石が善応寺あたりの
部落で見ることができるといふ。あつという間に二時間が経つた。
海鮮料理も美味だつた。

一つ、耳新しい情報をいただいた。河野氏を取り潰した秀吉の神
社参詣を狙つて事前に掃討された「河野残党の墓群」が広島県三原
市野串町八幡という山の中にあつて、その経過をまとめた宮崎信昭
氏のレポートが手元にある、と。翌日、ふるさと館の方へ頂戴に上
がる約束が出来たところで、散会した。気持ちのいい、温かい時間
だつた。



竹田寛氏(風早歴史文化研究会会長)



三原市野串町八幡に眠る「河野遺臣」の墓群

外はすっかり夜闇に閉ざされているが、昼間に確認しているだけに迷うことはなかった。竹田さんと別れると真っ直ぐ、クルマを駆って、河原の渡部家を目指した。夜の明かりが灯っているかどうか、それだけを確認したかった。表通りから左折した。クルマで抜けるにはギリギリの道幅だが、ヴィッツなら問題はない。渡部家の門前に着いた。広い敷地の奥で、ぼんやりと屋敷の形が浮かび上がる。そして、一階の一部屋だけ、ボンボリを灯したような、黄色の薄明かりが漏れていた。ざわざわと身体中の血液が、その時、泡立ったのはなぜだろう。ああ、まだあい見(まみ)えてこそしていないが、そこに渡部一族の誰かが暮らしている、と判った安堵感か。とにかく

それは秀吉襲撃を企てた男たちの哀しき末路だったの



く、あれだけ電話しても、受話器をとってくれる気配のなかった虚しさから、やっと解放されるのか。今度こそ！ 公衆電話を求めて、再び「街道」に戻った。

■嫁入り道具がそのままに

渡部家の電話番号は、風早入りした初日に、戸籍謄本を取得した北條市役所の電話帳でメモしておいたものだった。

左耳に当てた受話器からコール音が響く。カチツと電話を取り上げた気配。続いて若い女性の声が応じた。

「はい、渡部です」

物静かな、人の心を優しく包むような、安定感のある受け答えだった。こちらからの電話をした意図を、慎重に聴きとめている気配。

ゆっくりと、こう伝えて来た。

「祖母が骨折しておりますので、電話に出ることができません。三分後に、もう一度、お電話をしていただけますか？」

見事な標準語であることより、無駄のないレスポンスに、嬉しくなった。間違いなくかなりの社会的な訓練を受けた女性だ。どこかの会社の秘書を経験している、そんな見当をつけても、あながち間違っではないはずだ。

三分が経った。

「孫の美枝といいます」

と、自己紹介してくれたところで、こちらの都合を訊いてくれる。そちらの都合に合わせる、と答える。

「では、明日の七日は都合が悪いので、八日、木曜日の十一時にお待ちしています。それから、今、祖母が電話に出ます」

一瞬の間があつて、「祖母」と紹介された女主人の声に替わった。

「先代から、この家の伯母に当たる人が駆け落ちして、九州の方に住んどられたという話はきいている。二階に、その方の嫁入り道具を蔵(しま)ったままの部屋がある。どうぞ、お出てください」

そんな内容を、すこし早口で、話してくれた。大発見である。一〇〇年前の、祖母の花嫁道具がそのまま保存されているなんて！長五郎・コマ夫妻の無念と愛情の深さを察してしまう。

電話を切ったあとの余韻は、門田旅館の部屋に戻ってからも、消えなかった。

早速、手元にある戸籍謄本を取り出し、確認する。「改製原戸籍」までしか取得できていないが、太平洋戦争で戦死した桂さんの妻・アイコさんが、祖母と呼ばれた女性だろう。大正三年生まれ。八六歳。年頃もぴったり合う。松山市中一万町の野本家から、昭和一年に嫁いで来ている。桂さんとはたった六年の結婚生活。大変な時代を生き抜いてきた女性が、血族のなかにいる。逢えるのは、明後日か。そこまで考えたとき、強烈な睡魔に襲われてしまった。

その日の『風早紀行録』メモに、長かった1日をこう締めくくっている。

「新しい親戚・西明神の侶則氏にTELした。明日、伺いたい、と。八幡の良枝さんにも展開を報告。びっくりしながら喜んでいた。一〇時、もう起きていられない」

眠りの世界に崩れ落ちていったのを、想い起こす。それでいながら、午前二時に目を覚ましてしまった。頭の中はONの状態が続いていた。朝を待った。